

*Prince Caspian*にみられる「信仰」と「不信」

岡 田 理 香

Belief and Disbelief in *Prince Caspian*

OKADA Rika

序

Prince Caspian は *The Lion, the Witch and the Wardrobe* の次に出版されたため、登場人物や話の流れなどに繋がりが見られる。物語は前作 *The Lion, the Witch and the Wardrobe* から一年後とされている。冒頭で Peter、Susan、Edmund、Lucy は休暇を終えて学校の寮へ戻るために駅のベンチに座っている。

The first part of the journey, when they were all together, always seemed to be part of holidays; but now when they would be saying goodbye and going different ways so soon, everyone felt that the holidays were really over and everyone their term-time feeling beginning again, and they were all rather gloomy and no one could think of anything to say.¹

一つの駅から出発して兄弟と離れ離れになっていく悲しみは、作者 C. S. Lewis 自身が少年時代に味わった感情を描写したものであろう。Lewis も少年の頃に全寮制の学校に入り、休暇が終わると Wyvern 駅で兄と別れ、別々の学校へ向かっている。²

Prince Caspian では Peter、Susan、Edmund、Lucy が駅のベンチに座っているところを

¹ Lewis, C. S. *Prince Caspian*. London: HarperCollins, 1980. p.11

² Green, Roger Lancelyn and Hooper, Walter. *C. S. Lewis: A Biography*. London: HarperCollins, 2002. pp.8-12

魔法で強く引っ張られて突然Narniaに戻される。これは作者が少年時代に感じた、学校へ戻りたくないという逃避願望が投影されているものと思われる。

*The Lion, the Witch and the Wardrobe*ではNarnia暦1000年であった。イギリスではそれから一年しか経過していないのに、*Prince Caspian*ではNarniaはすでに千年以上が経過してNarnia暦2303年になっている。これは、別世界にはこの世とは別の時間が流れているという作者の考えによるものである。Lewisは『神と人間との対話』でこう述べる。「死者たちは、わたしたちの時間のように直線では全くない——いわば、長さだけでなく厚みをもっていると言えるような——時間を経験すると言えるかもしれない。」³このようにLewisは、別世界では人間界と違った時間があるという時間観を用いている。

*The Chronicles of Narnia*全七巻中、*Prince Caspian*、*The Voyage of the Dawn Treader*、*The Silver Chair*の三巻はCaspian三部作とされ、Caspianの幼少時、航海、そして死と再生が扱われている。⁴各巻はそれぞれ異なるテーマを持ちながらも、三巻は一貫して、人間のあるべき姿を描いているように思われる。*Prince Caspian*では登場人物たちが幾度となくAslanを信じるか信じないかの岐路に立たされる。ある者は信じて勝利を得、別の者は不信を露わにして命を落としていく。信仰と不信との戦いが、この作品の一つのテーマであるといえよう。⁵本論では登場人物を中心に、*Prince Caspian*に見られる信仰と不信、さらに作者の用いた漸層法の効果を見ていくことにする。

1. 三人の不信

*Prince Caspian*ではAslanが長年の不在の中、登場人物たちが様々な形でAslanへの態度を現わしている。まずMirazはNarniaの創世記やPeterたちの統治した黄金時代をお伽話として葬り去ろうとする。次にNikabrikはAslanの存在そのものを否定し、他の力に依存しようとする。そしてTrumpkinもAslanをただの昔話と考えている。ここではこの三人の不信について見ていく。

第一にMirazの不信について見ていくことにする。彼は王位に就くためには殺人をも厭わない人物で、Narniaの王として君臨しながら、動物と人間とが共存した時代の話やAslanの存在を話に出すことを禁じている。そして、Caspianの乳母がCaspianに古のNarniaについて話をしたことを知ると乳母を解雇する。作者はMirazに無神論者の姿を当てはめているのであろう。C. S. ルイスの宗教的著作*Mere Christianity*によると無神論者は「全世界のすべ

³ ルイス, C. S. 『神と人間との対話』竹野一雄訳, 東京: 新教出版社, 1995. p.177

⁴ 柳生望, 『ナルニアの国は遠くない』東京: 新教出版社, 1981. p.76

⁵ Schakel, Peter J. *Reading with the Heart: The Way into Narnia*. Grand Rapids: William B. Eerdmans, 1979. p.35

ての宗教の根底がまったく巨大なる間違いである（と信じる）。⁶ そして Miraz がそうであるように、自分自身の世界を自分の好むままに建て上げて、何者にも邪魔されず、自分が世界の中心と考えるのである。このような Miraz の姿は、自己中心から罪がはらみ、過剰な自己愛を持ち、神否定に走った一例を示したものである。

第二に Nikabrik の不信について見ていくことにする。彼は Aslan を信じない上、窮地に陥った際には、別の悪魔的な力に依存して、困難な状況から脱出しようと試みた。別の存在に依存したという点で、Nikabrik は異端者と捉えることが出来よう。彼は Wer-Wolf や Hag と行動を共にし、遂には彼ら共々命を落とすことになってしまう。窮地に陥った際に静かに待つことをせず、直ちに解決することを求めて別の何かに依存し、異端に走ってしまう人物の姿が描かれている。どんな場合でも信じて本当の力の到来を待つ重要さを、作者は提示しているものと思われる。

第三に Trumpkin の不信である。彼は who believes in Aslan nowadays? と嫌疑を露わにし、Aslan や過去の Narnia の黄金時代についても、否定的な立場を取る。しかし Peter たちと出会い、Aslan と出会うことで一切の疑いや不信を一蹴し、信じる立場へと転換するのである。彼の姿はキリストの十二弟子の一人トマスの姿を彷彿とさせる。キリストが死から復活した後、弟子たち皆が、キリストと出会った、復活した姿を見た、と言う中、トマス一人だけは「自分の目で見なければ信じない」と頑なに仲間の情報を受け入れなかった。しかしキリストがトマスに現れて、トマスはようやくそれを信じた。キリストがトマスに自らの体を指し示し、触るように言い、「見ずに信ずる者は幸いです。」⁷ と述べたように Aslan も Trumpkin に近づき “Son of Earth, shall we be friends?” と尋ねる。作者はトマスの姿を Trumpkin に投影することで、不信から信仰へと変えられた一つの型を示したのである。

不信の三人の姿は、自己中心的な無神論者、他に依存する異端者、見て信じた改心者のケースとして捉えられる。この三人と対照的に、物語全体を通し信じる心を貫いた登場人物たちもいる。それについては次で述べることにする。

2. 三人の信仰

不信に陥る登場人物たちと対比し、一貫して信仰を持ち続ける人物たちの姿も描かれている。Trufflehunter は仲間が異端に走っても自らの信仰を見失わなかった。そして Caspian は乳母から聞いただけの古の Narnia を信じ、まだ出会わないうちから Aslan を信じた。また Lucy も窮地に陥っても Aslan を信じて従い、兄弟たちの道しるべとなった。ここでは三人の信仰を見ていくことにする。

⁶ ルイス, C. S. 『キリスト教の世界』 鈴木秀夫訳, 東京: 大明堂, 1994. p.42

⁷ ヨハネの福音書 20 : 29

第一に Trufflehunter の信仰について見ていくことにする。彼は「動物は心変わりすることがない」と述べ、Aslan への信仰を変えないことを示した。その後、彼の仲間であった Nikabrik が裏切って謀反を起こした時にも、仲間の裏切りに加担せず、助けが来ると信じて待ち続けた。彼は Nikabrik と対照的に描かれ、Nikabrik が自らの謀反から争いを招き、自身が命を落としたのに対し、Trufflehunter はその信仰を変えることはなく、生きながらえて Aslan と出会えたのであった。ここで信じる者 (Trufflehunter) の生命と信じない者 (Nikabrik) との死が対照的に描かれている。

第二に Caspian の信仰について見ていくことにする。Caspian は Trufflehunter や Nikabrik との会話の中、Aslan を信じる人など今の時代にいるのかとの問いに対し、「私は信じる」と答え、Aslan に対する信仰告白を明確にしている。

“As firmly as *that*, I daresay,” said Trumpkin. “But who believes in Aslan nowadays?”
 “I do,” said Caspian. “And is I hadn’t believed in him before, I would now. Back there among the Humans the people who laughed at Aslan would have laughed at stories about Talking Beasts and Dwarfs. Sometimes I did wonder if there really was such a person as Aslan; but then sometimes I wondered if there were really people like you. Yet there you are.”⁸

この場面はキリストの問いに答えたペテロの答えと対応するものである。“Jesus said to Simon Peter, ‘Simon son of John, do you truly love me more than these?’ ‘Yes, Lord,’ he said”.⁹ このような信仰告白について、新約聖書においてパウロはこう述べる。

That if you confess with your mouth, ‘Jesus is Lord,’ and believe in your heart that God raised him from the dead, you will be saved. For it is with your heart that you believe and are justified, and it is with your mouth that you confess and are saved.¹⁰

この後 Caspian は王にふさわしい人間へと成長していく。それは信仰告白した Caspian が、窮地に立たされても決して Aslan への信頼を曲げず、信仰告白を通して救われる者とされたからである。そのため不信との戦いと実戦の両方において勝利を収めることができた。Miraz 軍との戦いにおける勝利はその象徴である。

第三に Lucy の信仰である。Peter、Susan、Edmund、Lucy と Trumpkin が Caspian のも

⁸ Lewis, C. S. *Prince Caspian*. London: HarperCollins, 1980. p.65

⁹ John 21 : 15

¹⁰ Romans 10 : 9-10

とへ向かう際、途中で川に突き当たり、皆は谷に降りることに決める。だがLucyだけは山上にAslanを見つけ、山に上るべきだと主張する。しかし他の者は賛成してくれず、一行は下る道を取る。行くべき道が示されているにも関わらず、Lucyはその道に従うことができなかった。一行の選んだ道も結局は間違いで、進んだ先で敵と対面してしまい、丸一日かけて進んだ道を引き返す羽目になる。この場面は旧約聖書においてイスラエル人たちが、神の教えに聞き従わなかったために、四十年も荒野をさまよった状況と類似している。(申命記8章) さらにこの場面はパウロの言葉“sins of attitude can separate man from God.”¹¹を示しているとも取ることが出来る。

その夜LucyはAslanと出会い、自分の過ちを悔いる。LucyはAslanに皆の者を起こして連れてくるように言われる。この場面について野呂有子はこう述べる。

一見、苛酷なこの仕事は、実は、アスランの深い愛のから出たものだといえる。いったん道をふみ誤った者に対してやり直す機会を与えているのだから。これは、ルースイーにとってのみならず、残りの四人にとってもやり直しの機会なのだ。

力づけられて決然として試練に立ちむかうルースイーに、‘Now you are a lioness,’とアスランは言う。これは、この物語の枠組においては最高の誉め言葉である。ルースイーはこの上なくアスランに近い者として認められたのだ。¹²

LucyだけにAslanが見え、lionessと言われ、Aslanのもとへ導く先頭に立つのは、子どもが「一番偉い人」とされている宗教的概念を土台としているからであろう。(マタイの福音書 18:4) Lucyは最年少であるが故に、最初は自分の主張を通すことが出来なかった。だが一番幼いがゆえに、一番神に近い者とされた。そしてEdmund、Peterに続いてSusanにもようやくAslanが見えるようになったのはLucyの信仰の恵みに与りAslanとの正しい関係を取り戻したからである。¹³

こうして「不信」を克服した者、Trufflehunter、Caspian、Lucyたちは勝利を収めていく。MirazやNikabrikのように不信のまま終わった者たちとは対照的な最後である。作者はこの作品を通して、どのような状況にあっても服従することが不信を克服する鍵であるとも示唆しているのであろう。作者は信じる者と信じない者とを対照的に描き、信じて貫き通した者の受ける祝福を描いているのである。

¹¹ Lindskoog, Kathryn Ann. *The Lion of Judah in Never-Never Land*. Grand Rapids: William B. Eerdmans, 1973. p.91

¹² 野呂有子, 『『ナルニア国年代記』における子どもたちの成長——その2——『カスピアン王子のつのぶえ』における霊的相剋と肉の闘争』東京: 東京成徳短期大学紀要, 1986. vol.19 p.53

¹³ 本多峰子, 『天国と真理: C.S.ルイスの見た実在の世界』東京: 新教出版社, 1995. p.257

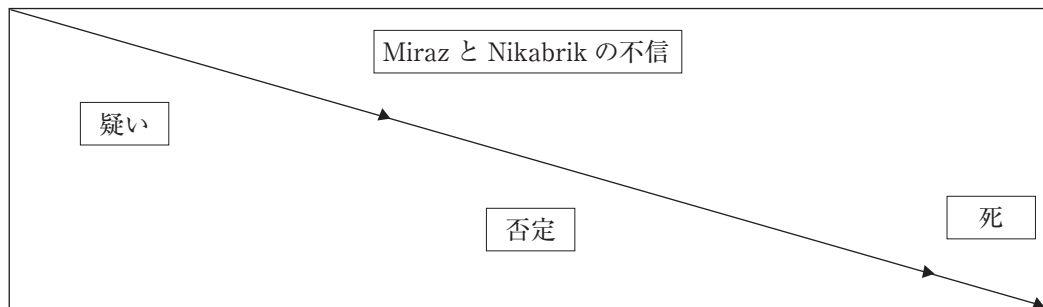
3. 漸層法に見る同化

Prince Caspianの中にはそれぞれの人物の生き方や決断が示されているが、彼らの行動は作者のキリスト教的世界観によって解釈され、提示されている。この物語には人間としての正しい在り方とそうでない在り方が示されている。前者は自らの経験を忘れずに理性を働かせ、希望を持ち続けて困難に立ち向かい、後者は嘘や傲慢で心を満たし、自己中心に陥る。正しい在り方は自分だけでなく他者にも喜びをもたらし、そうでない在り方は苦しみをもたらすことが描かれている。

人間が悪に至る道について、Lewisは*The Screwtape Letters*において、悪魔がどのような方法で人間を誘惑し、悪の道へ陥れるかについて具体的に描いている。その中でも作者の漸層法思想が表われている悪魔の台詞がある。

もし罪の集積的効果によって人を光から漸次遠ざけ、虚無の中にじりじりつれこむなら、罪はどんなに小さくても構わない。もしトランプで事がすむなら、殺人もトランプと選ぶところない。まこと地獄への最も確実な道はなだらかな道である——ゆるやかな勾配、やわらかな足ざわり、急な曲り角もなく、里程標もなく、道しるべもない 道である。¹⁴

*Prince Caspian*において、悪に手を染めた者たちも徐々に悪の道へと陥っていった。Mirazは当初は往年のNarniaをお伽話とするだけであったが、Narniaの動物と出会っても、尚否定し続け、最後にはかつてのNarniaの王Peterとの戦いを余儀なくされて命を落とした。Nikabrikも、AslanやPeterたちに対する疑念、そして否定、最後には他の存在へ依存して反乱を起こすことで、自らの命を失うことになった。

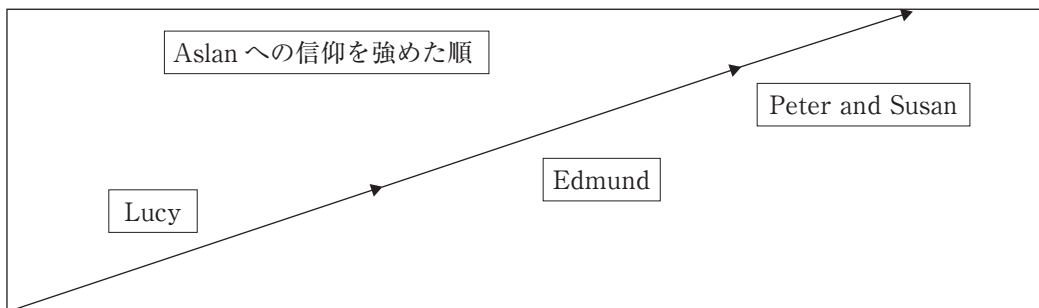


¹⁴ ルイス, C. S. 『悪魔の手紙』 森安綾、蜂谷昭雄訳. 東京: 新教出版社, 1995. p.85

作者は人間の正しい在り方として、この作品では「不信を克服すること」を示している。それは急に克服できるものではなく、徐々に困難に打ち勝っていくものであり、作者はやはり漸層法を用いることで、物語の終盤に向けて高揚を進めていく。LucyがAslanと会った夜、You're biggerと言ったLucyに対し、Aslanはこう言う。

That is because you are older [...] every year you grow, you will find me bigger.¹⁵

小さい子供は成長するにつれ、周りの物や大人が小さく思えてくるものであり、それはその人自身の体が大きくなっているからに他ならない。しかしここでLucyは逆に、久しぶりに会ったAslanが以前よりさらに大きくなったと感じている。Aslanの応えは、身体の成長のことを述べているのではなく、Lucyの持つAslanへの知識や認識が成長したことを示しているのである。ここでも作者は年ごとに人に増し加えられる知識や信仰を漸層的に描いている。



Lucyが皆をAslanのもとへ連れて行く際に、最初はLucyだけがAslanを見、皆はLucyを見ていた。やがて次にEdmundが、そしてPeterがAslanを見えるようになり、さらにSusanとTrumpkinにも見えるようになる。作者は漸層法に加え、諺“Seeing is believing”をここで逆に用いて“Believing is seeing”の形を表わし、信じる者には見ることが出来ると示唆している。登場人物たちの信仰がAslanとの関係を回復させ、そして彼らの行く道もその後の方向性も正しい方へと導かれていった。この様子が、漸層法の効果により、読者は登場人物に感情移入しやすく、変化する状況を理解しやすくなっているのである。

おわりに

見てきたように、*Prince Caspian*には様々な形でAslanへの態度が見られる。MirazやNikabrikはNarniaの創世記や黄金期をお伽話として葬り去ろうとする。それに対し、

¹⁵ Lewis, C. S. *Prince Caspian*. London: HarperCollins, 1980. p.124

Caspianの乳母やCaspian、Trufflehunterは嘗てのNarniaを史実として認めAslanを信じ、さらにTrumpkinは見てから信じた。物語の中盤にはAslanの姿が見えたLucy、彼女を信ずるEdmund、それに徐々に信じたPeter、Susanが描かれている。

Aslanを最後まで信じなかったMirazとNikabrikは自分の力や他の力に依存し、命を落としていった。Aslanを信じたLucyやCaspianはAslanへの信頼を深めて一人の人間として成長していく。CaspianたちはMirazという目に見える敵に勝っただけでなく、不信という目に見えない悪にも勝利したのである。特にCaspianは信仰告白したからこそ、王にふさわしい人間へと成長していったのである。

物語の終盤、CaspianはAslanに、自分は王になるのに相応しくないと述べる。Aslanはそう思う者こそ相応しいと告げ、王位を授ける。この場面は、人間には謙虚さが必要で最も大切であるという作者の考えによるものであろう。¹⁶

作者は聖書に基づき、見ずに信ずる者は幸いであるという信念を持つ。信じたものは縮福を受け、勝利を治める。また窮地に陥った時に彼らの信仰はますます磨かれ、信仰を深めて行く。作者は*Prince Caspian*において登場人物たちの成長とAslanへの理解と信頼を深める様子を描き、信じる者と信じない者とを対比して描いた。前者は勝利へ導かれ、後者は滅びの道へ堕ちていった。さらに善への道も悪への道も徐々に進んでいくものであることを漸層的に描いた。この作品は人々の信仰が如実に描き出された作品であり、そして作者の考える信仰の勝利とはどういうものかを描いた作品なのである。

(おかだ りか 本学非常勤講師)

¹⁶ ルイス, C. S. 『キリスト教の世界』 鈴木秀夫訳. 東京: 大明堂, 1994. p.117